

# Interview

## ヴァアティム・レーピン

### 故郷ノヴォシビルスクの音楽祭を日本で開催

取材・文＝中東生  
Text＝Shinobu Naka

かつてブロン門下のヴァイオリンの神童として世界を沸かせた、ヴァアティム・レーピンも今年の8月で45歳を迎える。そのレーピンが2014年から故郷のノヴォシビルスクで音楽監督として行っている「トランスシベリア芸術祭」を、今年日本でもツアーで開催することになった。ちなみにレーピンが現在使用している楽器は、1733年製のストラディヴァリウス「ロード」。



© Gela Megreldze

ブロンとの出会い、  
大好きな日本

——木琴、ハーモニカ、アコーディオンのクラスが空いていなかったからヴァイオリンを始めたというのは本当ですか。  
レーピン（以下R） はい、もしもクラスに空きがあれば、今頃プロのアコーディオン奏者になっていたかもしませんが（笑）。子供の頃から音の出るおもちゃばかり欲しがっていたので、両親は私が音楽家になるという予感を持っていたようです。第4希望のヴァイオリンのクラスに入ってから半年後の6歳の時にはすでに舞台上立ち、そこでブロン先生と出会いま

した。私の最初の先生も、ザハール・ブロン先生と勉強していくのが私にとって一番良い道だと母に話してくれたようで、7歳からブロン・クラスに入りました。

——他の子供たちのように、ただ遊んでいたいなどという葛藤はありませんでしたか。  
R その頃のスケジュールといえば、学校、ヴァイオリン、ピアノ、帰宅後学校の宿題、毎日それだけでしたが、私は早いうちから舞台というものを知ったので、舞台上がれるためならば、他の子供たちと遊ぶ時間を犠牲にするなど、容易いことでした。それほど舞台が好きでした。

——初来日の印象は如何でしたか。  
R それはそれは素晴らしい思い出です。ジャパン・アーツの招聘で、ゲルギエフとキーシンと1カ月日本に滞在しましたが、コンサートは4回だけだったので、あとは温泉や観光に連れて行ってもらいました。その時から日本が大好きです。

——日本のどこが特に好きですか。

R 全部です（笑）。ファンの方々、素晴らしいコンサートホール、伝統、料理。もう数えきれないほど訪日しましたし、今年のように1年に2、3回日本を訪れる年もありますが、今まで、まだ一度も嫌な思い出がありません。

「トランスシベリア芸術祭」  
について

——この芸術祭を始めたきっかけは何ですか。  
R 自分の生まれ故郷であり、17歳まで勉強したノヴォシビルスクを世界にもっと知ってもらいたいと思ったのがきっかけですが、この街で大切な音楽仲間たちが会えたらいいなあと模索していました。3年ほど策を練っていた頃、新しいホールが建つことになり、この機会を逃してはいけない、と決行しました。そのアルノルド・カツコンコンサートホールは、ノヴォシビルスク交響楽団の創設者の名前にちなんでいます。シベリア鉄道がかつ

て、「東西を結ぶ」と謳って作られたのと同じように、この音楽祭もそのような目標を掲げています。そしてこの音楽祭を通して、私の大好きな日本に行かれる回数も増えたらいいなと目論んでいました（笑）。

——そんなわけで第1回目は一流の音楽家であるだけでなく、私の真の友人と言えるケント・ナガノに振ってもらいました。彼はアメリカ人といっても、日本の血をひいているわけですから、音楽祭と日本を繋いでくれるのではないかと期待しています。その第1回目はサンクトペテルブルクとモスクワへ遠征に出掛ける規模でしたが、第2回ではシベリアの小都市も回るようになり、第3回目の今回はようやくアジアツアーができるので本当に嬉しいですね。

——今回の日本ツアーでは札幌にも行かれますが、ノヴォシビルスクと姉妹都市の関係にあるこの街には、今年20周年を迎えるシベリア・北海道文化センターもあります。そのような背景も含め、政

■公演情報

〈トランス=シベリア芸術祭in Japan 2016〉他  
 ●ザハロワ&レービン「瀕死の白鳥」  
 〈日時・会場〉6月11日17時・愛知県芸術劇場コンサートホール〈問合せ〉中京テレビ事業 052・957・3333  
 ●ザハロワ&レービン夢の共演  
 〈日時・会場〉6月15日19時・ベシア文化ホール（前橋）〈問合せ〉前橋市民文化会館 027・221・4321  
 〈日時・会場〉6月17日19時・サントリーホール〈問合せ〉AMATI 03・3560・3010  
 ●レービン&諏訪内&マイスキー&ルガンスキー  
 〈日時・会場〉6月18日18時・サントリーホール〈問合せ〉AMATI 03・3560・3010  
 〈日時・会場〉6月20日・札幌コンサートホールKitara大ホール〈問合せ〉オフィス・ワン 011・612・8696  
 ●レービン&マイスキー協奏曲の夕べ  
 〈日時〉6月22日19時〈会場〉東京オペラシティコンサートホール〈共演〉広上淳一（指揮）、日フィル〈問合せ〉AMATI 03・3560・3010

「ノヴォシビルスクを世界にもっと知ってもらいたいと思ったのが音楽祭を主宰したきっかけです」



トランス=シベリア芸術祭でのレービン ©Trans-Siberian Art Festival / Alexander Ivanov

政治的な意味合いも音楽祭を始めるきっかけでしたか。

R 政治的に理解し合えない場合でも、コンサートや展覧会、劇場を通して、人と人が解り合えることが一番重要な解決法だと思います。そのような役割を担え

る音楽祭にしたい、とは思っています。

ヴァイオリニストとして精進を続ける日々の中で、音楽祭を主宰するということは並大抵なことではないと思いますが、その一番の喜びは何ですか。

R 本当に大変なことです。聴衆の皆さんが感動してくれている時の目を見る瞬間が、至福の時です。

芸術に大きな変化をもたらした家族

「ご自身のご経験では、子供を持つというごことは芸術に影響を及ぼしますか」

R それはもう、大きな変化をもたらします。自分のエモーションを表現する別次元が与えられ、別の色彩を与えられました。



夫人のザハロワと ©Trans-Siberian Art Festival / Alexander Ivanov

奥様（バレリーナのスヴェトラナ・ザハロワ）との共演もとても興味深い企画ですが、そのアイディアはどのように生まれたのですか。

R 実は初めは乗り気ではなかったのですが、スイスのローザンヌ近郊でルーナ・クラツシツクというフェスティヴァルをしているハゼリン・ヴァン・スヴェイ女史に長い間説得されて、仕方なくやってみたら、自分たちにとっても合っていたので、今ではなくてはならない表現法の一つです。もちろん彼女との出会いは、この人生になくてはならないものなのですが、芸術面でもお互いの表現が自然に重なり、普通バレリーナと共演するのと、向こうの方が速過ぎるか、遅過ぎるかのとどちらかなのですが、彼女とは、相

手に合わせようとしなくてもうまくテンポが重なります。共演の機会は少ないのですが、今年は「トランス=シベリア芸術祭」で、そしてその後も、日本の皆様にご披露できるのが楽しみです。

今後のご活動について教えてください。

R 私たちの職業は、先へ進めば進むほど難しくなっていく職業です。子供の頃から弾いている曲に、いつも新しい観点から対峙しなければならぬからです。それだけにどんどん興味深くなっていくとも言えますが、それに歳を重ねていくと、色々な面で無理がきかなくなっていく。そういう中で今一番お話ししたいのは、スコットランドの作曲家ジェームズ・マクミランが私のために書いてくれた協奏曲を、もうすぐグラスゴーで録音するということです。皆様に聴いて頂けるのは来年になりますが、ドイツ・グラモフォン時代に知り合ったレコーディング・プロデューサーが独立して作ったオニックスというレコード会社から発売されます。共演はロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管弦楽団で作曲家と同郷のオーケストラなので、一番適切な音が出せると確信しています。今からとても楽しみです。

かつての神童がヴァイオリニストとしてだけでなく、父親としての温かい微笑みを見せ、愛するパートナーとの共演を語り、芸術祭の発展に邁進する複合的な音楽家として成長し続けていると実感できたインタビューだった。